

近畿自動車道名古屋神戸線（四日市 JCT ~ 亀山西 JCT）建設事業に伴う

## 埋蔵文化財発掘調査概報VI



2016（平成28）年10月

三重県埋蔵文化財センター





北山C遺跡・西山古墳群全景（東から）



小牧南遺跡 石窯炉（東から）





鉢山遺跡西部（北東から）



釜塙内遺跡全景（南東から）



## 例　　言

- 本書は、平成27年度に実施した近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設事業に伴う緊急発掘調査の概要報告書である。
- 調査にかかる費用は、中日本高速道路株式会社が全額負担した。
- 調査は、下記の体制で実施した。

委託者 中日本高速道路株式会社

受託者 三重県

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター 調査研究3課（四日市駐在）

課長 森川常厚

主幹 服部芳人（課長代理）・松永公喜・浅野隆司・谷口隆亮・宮崎久美・大川操・溝田靖

主査 水橋公恵・中村法道・勝山孝文

主事 西脇智広・村上央

- 調査面積・期間等は下表による。

遺跡名(調査次)	調査面積 m <sup>2</sup>	調査期間	担当者	作業受託
北山C遺跡（第6次）	2,423	H27.6.5～H27.12.11	松永・水橋	㈱島田組
小牧南遺跡（第3次）	5,935	H27.6.5～H28.1.18	宮崎・勝山・村上	㈱島田組
鈴山遺跡（第2次）	6,256	H27.5.27～H27.12.7	中村・西脇	㈱アート
釜垣内遺跡（第5次）	3,644	H27.5.27～H27.12.18	浅野・谷口・大川	㈱アート
小社遺跡（第4次）	362	H28.1.12～H28.2.4	谷口・村上・大川	（ネクスコ労務提供）
北山C遺跡（一次）	216	H27.10.19～H27.10.22	村上・服部	（ネクスコ労務提供）
高ノ瀬遺跡（一次）	400	H27.4.21～H27.4.23	服部	（ネクスコ労務提供）
高ノ瀬遺跡（一次）	208	H27.7.7～H27.7.9	服部	（ネクスコ労務提供）
高ノ瀬遺跡（一次）	240	H27.10.5～H27.10.7	服部	（ネクスコ労務提供）

- 発掘調査及び本書の作成に際しては、石井寛氏・久保友康氏にご指導とご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。
- 本書で示す方位はすべて座標北で示し、測量には世界測地系を用いている。
- 本書では、以下のように遺構の略記号を使用している。

S H : 積穴住居 S B : 据立柱建物 S D : 構・古墳周溝 S F : 煙道付炉穴・集石炉

S K : 土坑・古墳主体部、土塚墓、陥ち穴（落し穴）土器埋設坑 S X : 埋甕炉 S Z : 石列

N R : 川跡

## 本文目次

- |   |                        |                 |
|---|------------------------|-----------------|
| 1 | 前言 .....               | (服部) (1)        |
| 2 | 北山C遺跡（第6次）・西山古墳群 ..... | (松永) (8)        |
| 3 | 小牧南遺跡（第3次） .....       | (宮崎・勝山・村上) (12) |
| 4 | 鈴山遺跡（第2次） .....        | (中村・西脇) (21)    |
| 5 | 小社遺跡（第4次） .....        | (大川) (29)       |
| 6 | 釜垣内遺跡（第5次） .....       | (大川) (32)       |
| 7 | 北山C遺跡（一次） .....        | (村上・服部) (39)    |
| 8 | 高ノ瀬遺跡（一次） .....        | (服部) (40)       |

# 写 真 目 次

表紙	鈴山遺跡縄文時代中期掘立柱建物 (北東から)	
巻頭図版 1	北山C遺跡・西山古墳群全景 (東から) 小牧南遺跡 石円炉 (東から)	
巻頭図版 2	鈴山遺跡西部 (北東から) 釜垣内遺跡全景 (南東から)	
1 前言		
写真1	八郷の歴史探検隊出前講座	7
写真2	北山C遺跡現地説明会	7
写真3	釜垣内遺跡現地説明会	7
写真4	鈴山遺跡見学会	7
写真5	イオンモール東員遺物展示	7
写真6	北星高校出前講座	7
2 北山C遺跡 (第6次)・西山古墳群		
写真7	西山 46号墳 (東から)	8
写真8	西山 11号墳・SK 303 (東から)	8
写真9	西山 47号墳 (東から)	9
写真10	西山 55号墳 (北から)	9
写真11	西山 55号墳北構土層 (北東から)	9
写真12	SK 315 (北から)	9
写真13	S B 70 (南東から)	9
写真14	SK 318 (南東から)	10
写真15	SK 319 (東から)	10
写真16	調査区風景 (東から)	10
写真17	調査区西部 (北東上空から)	11
写真18	調査区中央部 (西から)	11
写真19	調査区東部 (北上空から)	11
3 小牧南遺跡 (第3次)		
写真20	調査区全景 (東上空から)	12
写真21	SH 335 (北西から)	14
写真22	SH 344 (南から) ※ SH 339 が重複	14
写真23	SH 355 と石圓炉 (南東から)	14
写真24	SH 360 (南東から)	14
写真25	石圓炉 (南東から)	15
写真26	石圓炉 検出時 (南から)	15
写真27	S X 310 埋甕炉 (南から)	15
写真28	S X 310 埋甕炉の断面 (南から)	15
写真29	S B 327 (東から)	15
写真30	S K 342 陥穴 (北から)	15
写真31	堅穴住居出土縄文土器	16
写真32	石鎌・搔器・打製石斧・磨製石斧	16
写真33	SH 355 石圓炉出土黒曜石剝片	16
写真34	SH 324 (西から)	18
写真35	SH 332 (南から)	18
写真36	SH 338 (北から)	18
写真37	S B 325 (北から)	18
写真38	S K 334 (東から)	18
4 鈴山遺跡 (第2次)		
写真39	御在所岳を望む調査区全景 (東から)	21
写真40	S F 60 (北から)	21
写真41	S F 53 半裁 (東から)	23
写真42	S F 52 (左下)・SF 53 (中)・SF 54 (右上)・SF 99 (SF 53底面下) (北西から)	23
写真43	SH 50 (東から)	23
写真44	SH 84 (北西から)	23
写真45	S B 85・S B 86・S B 87 (南東から)	24
写真46	S B 88 (西から)	25
写真47	S B 89・S B 105・SH 63 (西から)	26
写真48	S B 89 柱穴C柱痕跡 (南から)	26
写真49	S B 89 柱穴D土器出土状況 (北から)	26
写真50	SK 61 (北西から)	26
写真51	石鎌・剝片	27
写真52	出土土器	28
5 小社遺跡 (第4次)		
写真53	第4次調査区全景 (南から)	29
写真54	SK 115 埋甕 (北から)	30
写真55	SK 23 出土鍵	30
6 釜垣内遺跡 (第5次)		
写真56	調査区全景 (北東上空から)	32
写真57	石溜土坑 SK 193 (南西から)	34
写真58	石溜土坑 SK 194 (南西から)	34
写真59	土器埋設坑 SK 210 (北東から)	34
写真60	SD 203 と NR 152・213 (北東から)	35
写真61	淨瓶	36
写真62	石鎌	36
写真63	S X 76 和鏡	37

写真 64 S X 76 鏡箱・鉄・毛抜き	37
<b>7 北山C遺跡（一次）</b>	
写真 65 調査坑No.9（南から）	39

## 挿図目次

<b>1 前言</b>	
図 1 遺跡位置図 (1:100,000)	3
図 2 北山C遺跡調査区位置図 (1:4,000)	4
図 3 小牧南遺跡調査区位置図 (1:3,000)	4
図 4 鈴山遺跡調査区位置図 (1:2,000)	5
図 5 小社遺跡調査区位置図 (1:2,000)	5
図 6 釜塙内遺跡調査区位置図 (1:3,000)	6
<b>2 北山C遺跡（第6次）・西山古墳群</b>	
図 7 遺構配置図 (1:1,200)	11
<b>3 小牧南遺跡（第3次）</b>	
図 8 遺構配置図 (1:800)	13
図 9 S H 355 石圓炉出土剥片重量	16
図 10 S H 324 遺物出土状況図・見通し断面図 (1:40)	
	19
図 11 S H 324 出土遺物 (1:4)	19
<b>4 鈴山遺跡（第2次）</b>	
図 12 遺構平面図 (1:600)	22
図 13 S B 85・S B 86 平面図・断面図 (1:100)	
	25
<b>8 高ノ瀬遺跡（一次）</b>	
写真 66 調査坑 36（西から）	40

## 表目次

<b>1 前言</b>	
表 1 近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～龜山西JCT）埋蔵文化財発掘調査経過表	2
表 2 普及公開活動一覧	6
<b>3 小牧南遺跡（第3次）</b>	
表 3 古墳時代初頭の堅穴住居一覧	17

# 1 前 言

## 1. はじめに

近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）の四日市JCT～亀山西JCTにかかる埋蔵文化財発掘調査を、平成20年度から実施している。

平成20年度から平成26年度に実施した発掘調査の概要是、発掘調査概報I<sup>①</sup>、II<sup>②</sup>、III<sup>③</sup>、IV<sup>④</sup>および同V<sup>⑤</sup>として、また、平成20年度に発掘調査を実施した伊坂窯跡と、平成21年度に発掘調査を実施した伊坂遺跡第3次・伊坂城跡第5次調査の結果については、発掘調査報告<sup>⑥</sup>を刊行し、公表している。その中に当該遺跡の発掘調査成果はさることながら、新名神高速道路事業の概要や発掘調査に至る経緯、保護措置などについても記載しているため、参照されたい。

## 2 平成27年度の調査

### （1）現地調査

昨年度までの3年間は、年間合計約5万m<sup>2</sup>という広大な発掘調査面積を、当埋蔵文化財センター職員全体の約1/3を四日市整理所に駐在させ、対応してきた。今年度は、若干発掘調査のピークは過ぎ、職員数が減る中、年度当初の計画としては、北山C遺跡、小牧南遺跡、鈴山遺跡、高ノ瀬遺跡、小社遺跡、釜垣内遺跡の6遺跡の二次調査を計22744m<sup>2</sup>、北山C遺跡、高ノ瀬遺跡の2遺跡の一次調査を計1052m<sup>2</sup>、合計23796m<sup>2</sup>の発掘調査面積が予定された。

昨年度までは、四日市JCT～新四日市JCT間の供用開始時期が迫る中、四日市工事区管内の発掘調査の優先度が高かったが、今年度は、概ね、菰野工事区、菰野四日市工事区、鈴鹿山工事区管内へと調査する遺跡が移った。しかし、昨年度同様に、調査区周辺では、建設工事が急ピッチで行われており、また、調査終了時期が近接していたため、年3回の全体調整の定例会の他に、適宜、工事計画との詳細な調整協議を現地で行った。

結果的には、二次調査は計18,620m<sup>2</sup>、一次調査は計1,064m<sup>2</sup>、合計19,684m<sup>2</sup>の発掘調査を行った。

### （2）室内調査

今年度も現地調査に重点をおいたため、室内調査においては出土遺物の洗浄・注記等の一次整理及び遺物実測等の二次整理作業を行ったに止まる。その中で、昨年度調査を実施した発掘調査概報の作成を実施した。

## 3. その他

調査の概要については、報道機関などへ資料提供を行うとともに、現地説明会を10月31日に北山C遺跡で、11月1日に釜垣内遺跡で、11月7日に鈴山遺跡で、11月28日に小牧南遺跡で実施した。特に、鈴山遺跡については、校区の小学校や地元の団体からの遺跡見学の依頼に対応した。また、地元団体や高等学校への出前講座も行った。さらに、イオンモール東員で、11月29日に新名神高速道路・東海環状自動車道開通に伴うイベントが行われ、筆ヶ崎古墳群出土の遺物と写真パネルの展示にも参加した。

### 【註】

- ① 三重県埋蔵文化財センター 2010 「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報I」
- ② 三重県埋蔵文化財センター 2012 「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報II」
- ③ 三重県埋蔵文化財センター 2013 「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報III」
- ④ 三重県埋蔵文化財センター 2014 「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報IV」
- ⑤ 三重県埋蔵文化財センター 2015 「近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報V」
- ⑥ 三重県埋蔵文化財センター 2011 「伊坂窯跡・伊坂遺跡（第5次）発掘調査報告」・三重県埋蔵文化財センター 2012 「伊坂城跡（第3次）発掘調査報告」

No	道路名	所在地	事業地内 後施工可 用面積	第一次調査 20年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	前回調査 面積	本次調査 面積	備考			
1	伊庵道跡-伊庵道跡	四日市市伊庵町	3,950	42								42					
				558	2,870							3,428					
				800	3,150							3,950	0	調査終了			
2	伊庵道跡	四日市市伊庵町	25,000	0	4,490	990		589	10,009	16,078				調査終了			
					8,000	2,500		4,100	12,400	25,000	0						
3	北山山道跡 北山山道跡	四日市市大槻町、桑名市志紀 四日市市北山町	22,000	1,235				600	1,000	216	1,816			路線内26年度に調査終了。 20年度以降は、工事用道路部分・26年度以降工事用道路二度調査あり			
								4,350	4,940	9,047	2,423	20,765	0				
								4,350	4,940	9,047	2,423	20,765	0				
4	野中道跡	四日市市北山町	15,500	15,500				500	500		1,000			調査終了			
								580	280		980						
5	風土道跡	四日市市北山町	11,000	11,000				950	500		1,450			調査終了			
								100	3,790	4,130	4,370	758	13,116				
								100	3,790	4,130	4,620	790	13,700	0			
6	若山山道跡	四日市市北山町	19,000	5,300				1,530	880		2,410			調査終了			
								6,400	10,825	18,405	6,173	41,693	0				
								6,400	10,712	17,333	6,900	41,645	0				
7	中野山道跡	四日市市北山町	43,000	1,155				580			580			調査終了			
								750	9,100	5,319		15,169					
								750	9,100	5,150		15,000	0				
8	蟹ヶ崎古道跡	四日市市小牧町	15,000	0				630			630			調査終了			
								6,426	6,438	6,940		19,812					
								6,426	6,438	8,000		20,864	0				
9	北山城跡-原林道跡	四日市市北山町	20,864	0							0			調査終了			
											0			北山城跡対象範囲に含まれる。			
											0						
10	原林古道跡	四日市市北山町	—	—				460	800	72	165	1,497					
								32	7,371			5,935	13,338				
								165	7,371			6,305	13,841	0			
11	小牧鹿道跡	四日市市小牧町	20,300	6,450							940			調査終了			
											940						
											940						
12	中野吉古道跡	四日市市中野町	7,000	7,000				200			200			調査終了			
											200						
											200						
13	野添御山山道	滋野町川北	1,000	1,000					830	280		1,290			調査終了		
									791			791					
									280			280	0				
14	桜ノ木道跡	滋野町池底	16,500	15,650					800			800			調査終了		
15	大久保道跡	鈴鹿市大久保町	12,000	12,000					980			980			調査終了		
16	野添御山山道	滋野町喜羽	8,000	1,700								6,256	6,256		路線内調査終了。 新規X-Y-HC計画(1,600m)あり		
												6,200	6,200	0			
17	大松道跡	鈴鹿市大久保町	2,200	2,200					180			180			調査終了		
18	喜ノ瀬山道	鈴鹿市山本町	33,600	33,600				1,580	789	848	3,197			路線内調査終了。 新規X-Y-HC計画(2,800m)あり			
19	折子道跡	鈴鹿市山本町	13,500	13,500				800			800			路線内調査終了。 新規X-Y-HC計画(3,700m)あり			
20	東方野道跡	鈴鹿市山本町	4,500	4,500					500			500			調査終了		
21	小杜道跡	鈴鹿市小杜町	12,000	8,025					1,020	400		1,420			調査終了		
									1,573			2,073	362	4,006			
22	垂田内道跡	鈴鹿市小城(須賀)	30,000	14,490					2,300	200		2,500			調査終了		
									7,014	3,031		3,644	13,889				
									8,500	3,200		3,810	15,110	0			
年度別調査 合計面積			336,314	154,714	42	0	3,060	7,330	5,160	5,222	1,294	1,064	23,172		H28. 3. 31現在 単位: m <sup>2</sup>		
					558	7,360	1,090	10,910	43,990	50,548	25,797	18,820	168,143	0			
					800	9,150	2,690	10,910	44,956	53,657	40,680	19,167	161,696				

表 1 近畿自動車道名古屋神戸線(四日市 JCT ~ 鬼山西 JCT)埋蔵文化財発掘調査経過表



図1 遺跡位置図 (1:100,000)

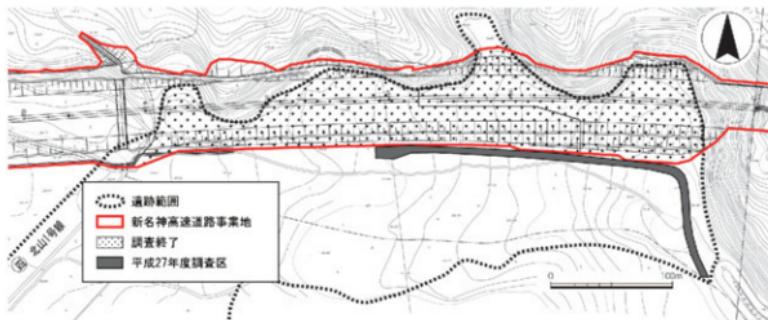


図2 北山C遺跡調査区位置図 (1:4,000)

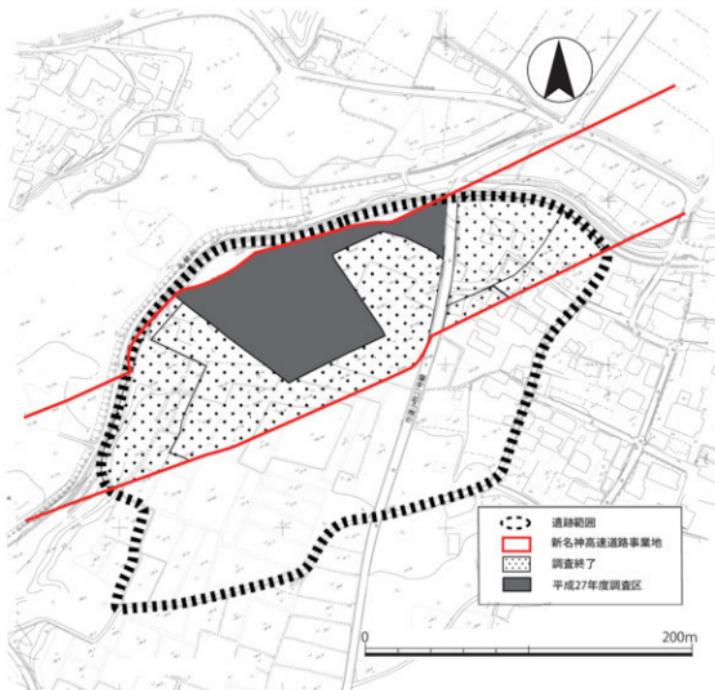


図3 小牧南遺跡調査区位置図 (1:3,000)

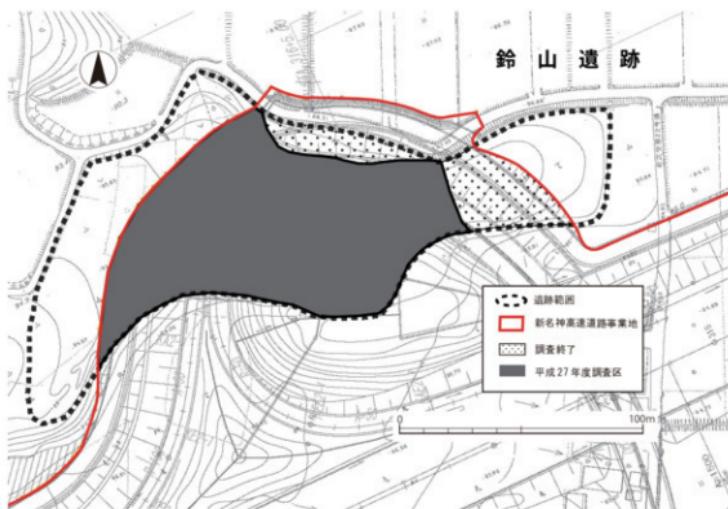


図4 鈴山遺跡調査区位置図 (1:2,000)

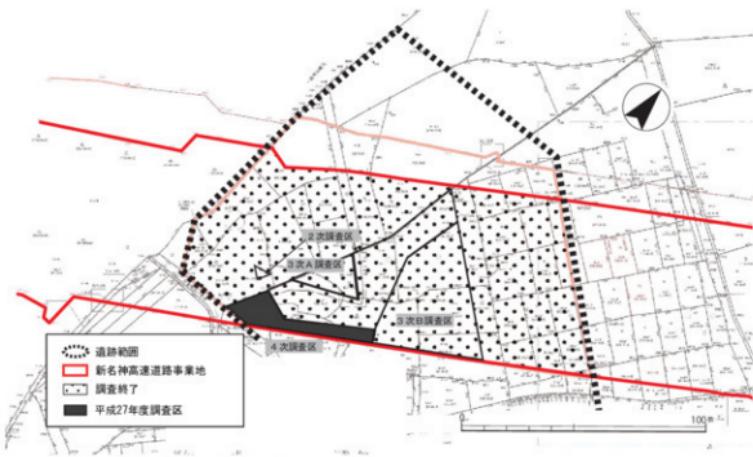


図5 小社遺跡調査区位置図 (1:2,000)

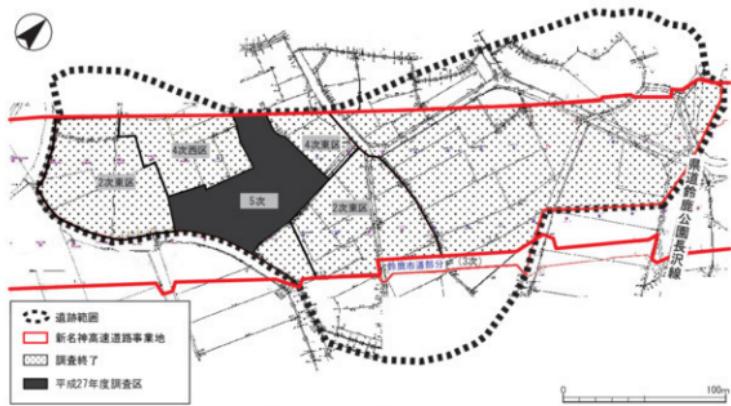


図6 釜塙内遺跡調査区位置図 (1:3,000)

内 容	所在地・会場	開 催 年 月 日	参 加 人 数
八郷の歴史探検隊 夏休み自由研究	伊坂町本郷・四日市整理所	平成27(2015)年7月30日(木)	24名
音羽 歴史を発掘する会 遺跡見学	鈴山遺跡	平成27(2015)年10月24日(土)	54名
千種地区 公民館 パスワード 遺跡見学	鈴山遺跡	平成27(2015)年10月28日(水)	49名
北山C遺跡(第6次) 現地説明会	桑名市志知	平成27(2015)年10月31日(土)	140名
並河内遺跡(第5次) 現地説明会	鈴鹿市小畠原町	平成27(2015)年11月1日(日)	119名
千種小学校 放課後こども教室 遺跡見学	鈴山遺跡	平成27(2015)年11月4日(木)	35名
鈴山遺跡(第2次) 現地説明会	三重郡菰野町	平成27(2015)年11月7日(土)	310名
小牧南遺跡(第3次) 現地説明会	四日市市小牧町	平成27(2015)年11月28日(土)	175名
イオンモール東員 開道行事 遺物展示	イオンモール東員	平成27(2015)年11月29日(日)	339名
千種小学校 5年生 遺跡見学	鈴山遺跡	平成27(2015)年12月1日(火)	51名
千種小学校 2年生 遺跡見学	鈴山遺跡	平成27(2015)年12月3日(木)	58名
北星高校 出前講座	北星高校	平成27(2015)年12月30日(日)	29名
八郷地区 歴史探検隊 出前講座	八郷地区市民センター	平成28(2016)年1月25日(月)	10名
保ヶ歴史を語る会 出前講座	保ヶ地区市民センター	平成28(2016)年3月19日(土)	19名

表2 普及公開活動一覧



写真1 八郷の歴史探検隊出前講座



写真2 北山C遺跡現地説明会



写真3 釜塙内遺跡現地説明会



写真4 鈴山遺跡見学会



写真5 イオンモール東員遺物展示



写真6 北星高校出前講座

## 2 北山C遺跡（第6次）・西山古墳群

### 1. はじめに

北山C遺跡は員弁川と朝明川との間、標高約60mの台地上に位置し、桑名市・東員町・四日市市にまたがる広大な遺跡である。

従来は弥生時代後期と古墳時代後期の集落跡と考えられてきたが、平成24年度の第2次調査において古墳10基が確認され、古墳時代中期の古墳群でもあることが判明した。さらに、遺跡は東方に広がるものと判断し、「周知の埋蔵文化財の範囲変更」を三重県教育委員会に通知した。

今回の調査区は、第2～5次調査区の南側に隣接する平坦地を対象とし、長さが約350m、幅が平均7mと、細長い。面積は2,423m<sup>2</sup>で、期間は平成27年6月5日～平成27年12月11日である。

### 2. 遺構と遺物

古墳14基と墓（土塚墓・木棺墓）2基・掘立柱建物1棟・土坑などを確認した。なお、古墳は西山古墳群に属するため、第3～6次調査で見つかった古墳に「西山○号墳」という名称を11号墳～55号墳まで付与した。（第2次調査の古墳10基は平成24年度に付与）

#### （1）古墳

14基を調査した。いずれも埴丘部分は削平されており、大半は周溝を残すのみであったが、11号墳の中央で主体部（SK 303）を確認した。



写真7 西山46号墳（東から）

古墳の形状は、方墳11基、円墳3基であった。西山古墳群全体でも、方墳は55基中46基を占め、圧倒的に多い。また、円墳は古墳群の西部に偏在する傾向が見られる。

古墳群の造営は、周溝から出土した須恵器・土師器の観察から、古墳時代中期頃と考えられる。

以下、主な古墳について記述する。

**46号墳（SD 301）** 大部分が調査区外のため四半分ほどの北東部を調査したのみであるが、11号墳とほぼ同規模と推測される古墳である。周溝の内側の形状から円墳と判断した。調査区の西壁際で、周溝内に古墳造営時に意図的に掘り残したものと考えられる土橋状の高まりを確認した。遺物としては、周溝の底から5世紀の須恵器が出土した。

**11号墳（SD 67）・SK 303** 第3次調査での北半部と今回の南半部の調査により、古墳のはば全体を確認した。規模は周溝を含めて、直径が約165m、周溝は幅16～30m、深さ30～45cmの円墳である。飛鳥時代の掘立柱建物（SB 70）と土坑（SK 302）が近接する周溝からは、古墳に伴う土器以外に飛鳥時代の土器が大量に出土した。飛鳥時代には埋まり切っていなかった周溝に、土器を遺棄したと考えられる。

SK 303は、古墳群で唯一円墳から検出された主体部である。規模は長さ3.1×幅0.6m、深さ20cmである。副葬品は出土しなかった。



写真8 西山11号墳・SK 303（東から）

**47号墳（S D 304）** 大部分が調査区外であるため、古墳の北部を調査したのみである。規模は周溝を含めて一辺 17.8 m、周溝は幅 2.0 ~ 3.0 m、深さ 17 ~ 33 cm で、大規模な部類に入る方墳である。周溝からは、土師器と須恵器が比較的多く出土した。

**55号墳（S D 317）** 東西の両端が調査区外であるがほぼ全体が推測される円墳である。規模は、周溝を含めて直径 18.2 m、周溝は幅 1.8 ~ 2.2 m、深さ 25 ~ 75 cm である。方墳ばかりの古墳群東部で確認された唯一の円墳である。

#### (2) 墓（土塙墓・木棺墓）

古墳群の東部で確認した 2 基（S K 314・315）について記述する。

**S K 314** 長さ 1.5 m × 幅 0.8 m、深さ 22 cm の墓である。これまでに古墳群で発見された墓の長さの平均が 2 m 弱であるので、比較的小さい墓である。遺物は出土しなかった。

**S K 315** 長さ 1.2 m × 幅 0.8 m、深さ 11 cm の墓である。これまでに古墳群で発見された中で 2 番目に小さい墓（1 番小さい墓は第 5 次調査 S K 207 の 1.16 m）である。棺を固定するためとみられる白っぽい粘土が検出されたが、遺物は出土しなかった。

#### (3) その他の遺構

**S B 70** 第 3 次調査において北半部の柱穴が確認されていたが、今回の調査結果と合わせて、3 × 2 間の掘立柱建物であることが判明した。時期が特定できない土師器の小片が 1 点出土した。第 2・3 次調査で検出した飛鳥時代の堅穴住居と方向を揃えることから、他の掘立柱建物と同様に飛鳥時代の遺構であると考えられる。



写真9 西山47号墳（東から）



写真10 西山55号墳（北から）



写真11 西山55号墳北溝土層（北東から）



写真12 SK 315（北から）



写真13 SB 70（南東から）

**S K 318** 平面形はやや楕円形で、長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 100cm の土坑である。土坑の底中央に直径 20cm、深さ 30cm 程の小さな穴がある。S K 319 も一部調査区外であるが、ほぼ同様の形状である。遺物は伴っていないが、縄文時代の遺構と分析された第5次調査の土坑 3 基と類似していることから、縄文時代の落とし穴と考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では 14 基の古墳を調査した。これで、遺跡内で確認された古墳はあわせて 50 基となり、数の上では石薬師東古墳群の 66 基に次ぐ、北勢地方屈指の規模となる古墳群であることが明らかとなった。周溝が調査区の南側へ延びる古墳があり、かつ平坦な地形が広がっていることから、これまでの調査区の南側にもさらに古墳が存在することが想定される。

これまでに埋葬施設が残っていた古墳は 2 基の方墳だけであったが、今回の調査で円墳（II 号墳）の埋葬施設も調査することができた。その成果として、円墳と方墳のどちらも細長く掘った穴に直接、木棺を安置して埋める木棺直葬であることがわかった。



写真 14 S K 318 (南東から)



写真 15 S K 319 (東から)



写真 16 調査区風景 (東から)



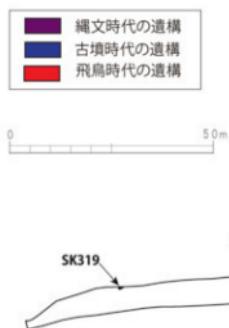
写真 17 調査区西部（北東上空から）



写真 18 調査区中央部（西から）



写真 19 調査区東部（北上空から）



西山1～5号墳は  
第2次西区にあり  
ます。

円墳は、1・2・4・  
5・10・11・13・46・  
55号墳の9基です。

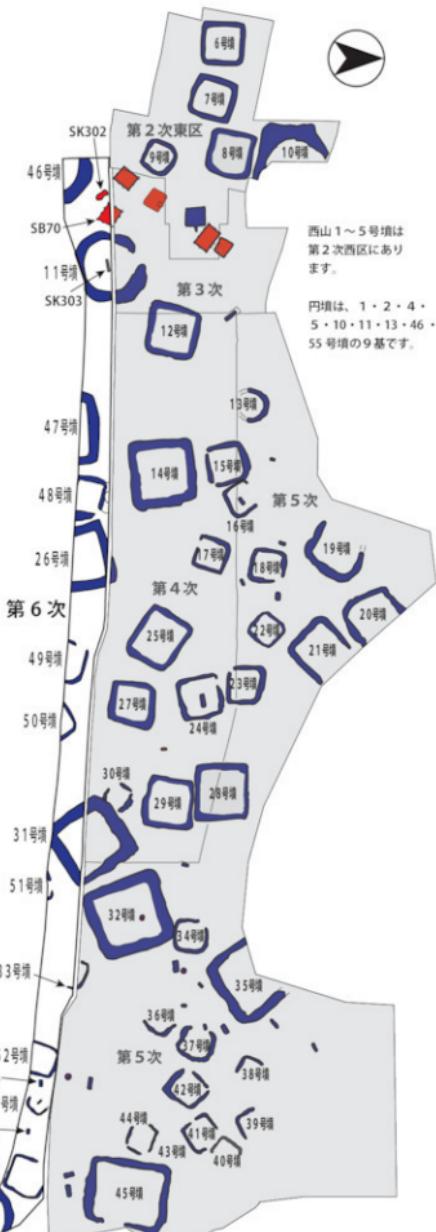


図7 遺構配置図 (1:1, 200)

### 3 小牧南遺跡（第3次）

#### 1. はじめに

小牧南遺跡は、四日市市小牧町字風呂屋に所在する。遺跡は朝明川中流右岸、鈴鹿山脈東麓から続く丘陵台地<sup>①</sup>の東端付近に位置し、標高30m程度の台地裾部の北向きの緩斜面に立地している。

遺跡の北側には朝明川の支流である名前川が台地の裾に沿って東流しており、朝明川のつくり出した沖積地と小牧南遺跡のある台地とを区分している（写真20）。

発掘調査は新名神高速道路の建設に伴って、平成23年度から行われており、これまでに、縄文時代中期の掘立柱建物や堅穴住居、古墳時代初頭の堅穴住居等が多數確認されている。今回は平成25年度の第2次調査で遺構が密集してみつかった地区からみて、北西側にある部分を中心に調査を行った（図8）。調査期間は、平成27年6月5日～平成28年1月18日まで、調査面積は5,935m<sup>2</sup>である。

#### 2. 縄文時代中期

##### （1）遺構

この時期の遺構として新たに堅穴住居4棟、掘立柱建物3棟、陥し穴<sup>②</sup>2基を確認した。整理途中であるが、概ね、東海地方の編年で島崎式・山ノ神I式前後<sup>③</sup>に併行する土器が出土している。前回調査で確認されている遺構と合わせると、堅穴住居は11棟、掘立柱建物は8棟、陥し穴は3基となる。

堅穴住居 S H 335・344・355・360の4棟を新たに確認した（写真21～24）。S H 335・344・355は、遺構の集中している調査区の中央部付近で検出されたが、S H 360のみ単独で調査区の北西部で検出されている（図8）。

各住居とも削平がすんでいるため、規模や平面形は壁周溝や炉・主柱穴の配置等をもとに推測する他ないが、いずれの住居も大きさは約4～5m四方で、平面形は、かなり丸みを帯びた隅丸方形と考え



写真20 調査区全景（東上空から）

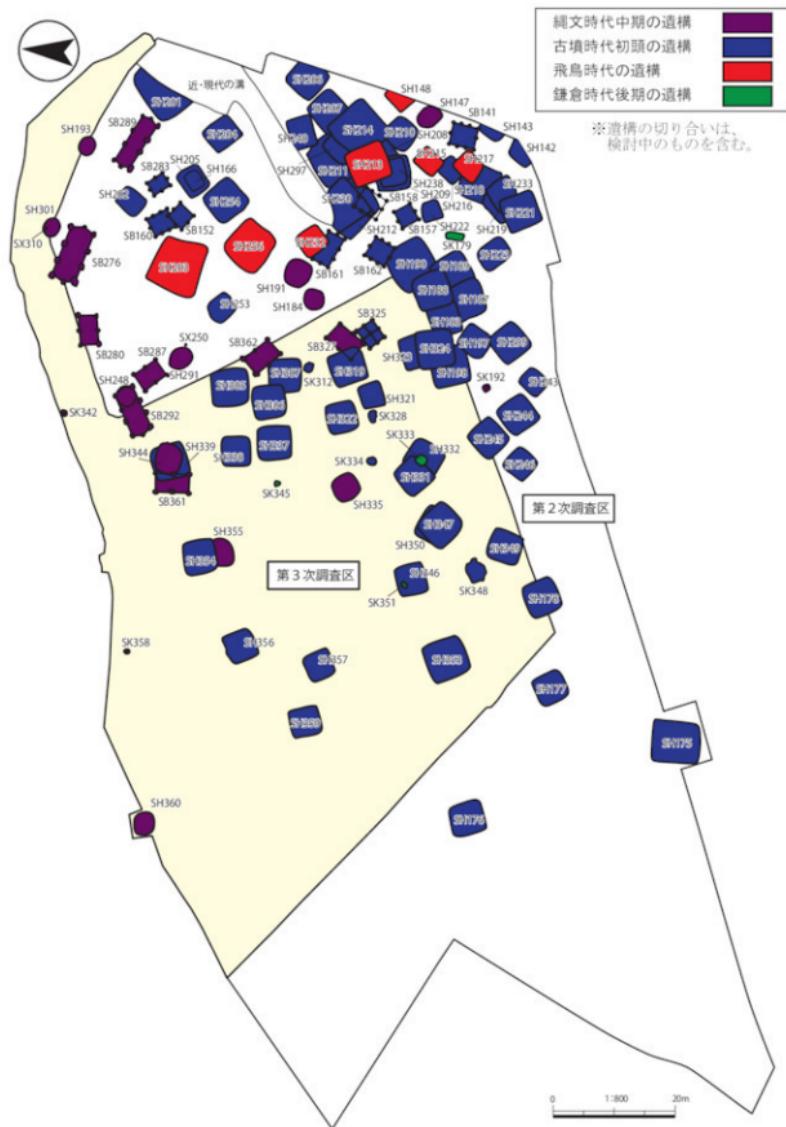


図8 遺構配置図 (1:800)



写真21 SH 335（北西から）



写真22 SH 344（南から）※SH 339が重複



写真23 SH 355と石圓炉（南東から）



写真24 SH 360（南東から）

られる。

壁周溝は、最も遺存状態の良いSH 335では、ほぼ全周で検出された。それ以外の住居では4辺ある壁のうちの1辺（SH 355・360）、または向かい合う2辺（SH 344）で検出されている。壁周溝の底部には凹凸があり、不規則に小ピットが検出されるものもあった。また、いずれの住居でも、壁周溝の1辺の中央部付近にピットや掘り込みがみられた。これは踏み段の痕跡<sup>④</sup>や、出入口付近でみつかることの多い埋甕の抜き取り痕<sup>⑤</sup>などと推測されているもので、いずれも出入口に関連する造作の痕跡である。このような壁周溝中央部付近のピットは、県内では他に蘿野町鈴山遺跡のSH 50に検出例があり<sup>⑥</sup>、岐阜県では塙原遺跡<sup>⑦</sup>・炉畠遺跡<sup>⑧</sup>・宮之脇遺跡<sup>⑨</sup>等で多数報告されている。

壁周溝は、SH 335・355・360では部分的に二重になっており、SH 335では溝が1本に見える部分でも2本の溝の重複であることが確認できた。また、SH 335の土層断面では、壁周溝は内側が古く、外側が新しいことが確認できた。SH 335では部分的な拡張を伴う建て替えが行われたことが窺える。

炉はいずれの住居でも中央からやや外れた位置で検出されている。前述の壁周溝中央部のピットとともに出入口を推定すると、炉は、いずれの住居でも出入口からみて、中央より奥方に作られていることになり、出入口から中央部付近までの空間を広くとろうとする意図が窺える。

**石圓炉** SH 355では石圓炉が完存していた（写真23）。炉の平面形は、径80cm程度の円形を呈し、深さは16cmである。炉穴側面には20～30cm程度の自然縫10個が貼付され、縫間の凹み3ヶ所には、拳大の小縫がはめ込まれていた。炉の底面と縫の側面は強く被熱し、赤変が顕著に確認できた（写真25）。なお、検出時には、炉内は炭化物を多量に含む灰で満たされており、中央には径9cm程度のチャートの円縫が存在した（写真26）。炉の外部から縫が石圓いを乗り越えて自然に転がり込むことは考えにくいため、炉の廃絶の際に意図的に置かれたものと思われる。

**埋甕炉** 埋甕炉（SX 310）は、その出土位置から、前回の調査で一部が確認されている堅穴住居（SH 301）に伴うものと考えられる。深鉢の体部

上半の筒状部分を地中に埋めて炉として使用している（写真27）。使用されている深鉢は全体的に被熱で脆くなっていた。取り上げる際に炉内部の土層断面を確認したところ、炉の底部には土器片が敷きつめられており、その上は厚い焼土層となっていた（写真28）。焼土層の上面は特に硬く焼き締まっており、底部に土器片が敷かれた後、土や焼土塊などが投入され、その上で繰り返し燃焼が行われている様子が感じられた。

掘立柱建物 SB 327（写真29）・361・362の3棟を新たに確認した。また、調査区外に延びるため前回調査では確認できなかったSB 276・280・292の残りの柱穴もほぼ想定通りの位置から検出され、これら3棟のプランも判明した（図8）。

前回調査同様、桁行の柱間寸法など、北勢地域の弥生時代以降の掘立柱建物には認められない特徴<sup>3</sup>を有することや、柱穴からの出土遺物が縄文中期の土器や石器に限られており、後世の遺物の混入が全くみられないことなどから、今回確認できた3棟もこの時期の遺構と判断した。

今回確認できた掘立柱建物は、いずれも桁行2間



写真25 石囲炉（南東から）



写真26 石囲炉 検出時（南から）



写真27 S X 310 埋壺炉（南から）



写真28 S X 310 埋壺炉の断面（南から）

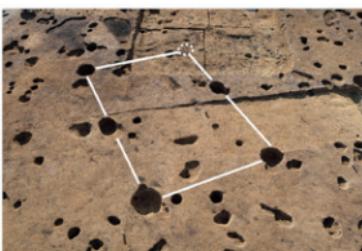


写真29 S B 327（東から）



写真30 S K 342 陥し穴（北から）

(5.2～53 m、柱間は 26～27 m の等間) × 梁行 1 間 (3.1～34 m) に収まる規模である<sup>②</sup>。

3 間 × 2 間の大型の掘立柱建物 (S B 276・289・292) に比べると、2 間 × 1 間の小型の掘立柱建物 (S B 280・287・327・361・362) は、集落のやや西側から南側に分布している。

離し穴 調査区北部の礎ぎわで新たに 2 基 (S K 342・358) を確認した (図 8)。前回調査で確認されているものと合わせると離し穴は 3 基となる。

S K 342 は、平面形はほぼ円形を呈し、径 1.1 m、深さ 1.1 m、底面の中央に径 20 cm、深さ 15 cm の小ビットを伴う (写真 30)。遺構の形態は縄文時代の離し穴として報告されている他の類例と矛盾しないものの、詳細な時期決定については、採取した炭化物の分析結果を待ちたい。

## (2) 遺物

前回の調査に比べると、出土した遺物は少なく、土器も小片がほとんどで、無文のものが多い。

整理途中であるため確定的なことは言えないが、先にも書いたとおり、島崎Ⅲ式～山ノ神 I 式前後<sup>③</sup>に併行する土器が主体である (写真 31)。

石器は、石鎚・搔器・打製石斧・磨製石斧・磨石・石皿など<sup>④</sup>、数は少ないものの多種にわたる (写真 32)。

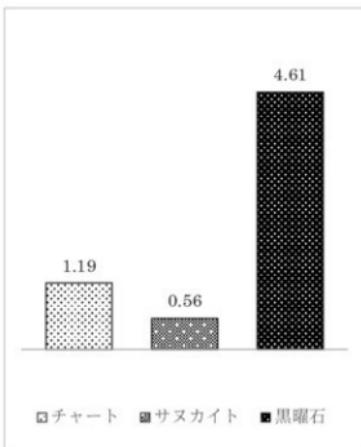


図 9 S H 355 石圓炉出土剥片重量 (単位 g)

石材は剥片も含め、黒曜石・下呂石・サスカイト・チャート・ハイアロクラスタイト・砂岩などがあり、在地で入手可能なものだけでなく、遠方でしか産出しないものも多く含まれている。

主な遺構の埋土は持ち帰り、篠いかけを行っているが、S H 355 内の石圓炉では、黒曜石の剥片 (写真 33) がサスカイトなど他の石材の剥片を圧倒している (図 9)。整理途中であるが、他の遺構から出土している剥片も黒曜石の割合が多いように感じられ、サスカイトが主体となることが多いこれまでの県内例<sup>⑤</sup>とは異なる傾向を示す可能性がある。



写真 31 積穴住居出土縄文土器



写真 32 石鎚・搔器・打製石斧・磨製石斧



写真 33 S H 355 石圓炉出土黒曜石剥片

### 3. 古墳時代初頭

#### (1) 造構

この時期の造構として新たに堅穴住居 21 棟、掘立柱建物 1 棟、土坑 4 基を確認した。造構は調査区の南東部に偏在しており、西にいくほど疎らになる。

**堅穴住居** 平面形はいずれも隅丸方形である。規模は最小のもので  $4.0 \times 4.2$  m、最大のもので  $7.2 \times 7.2$  m とばらつきがあるものの、概ね  $5 \sim 6$  m 前後のものが多数を占める。主柱穴は 4 基で、住居の隅に貯蔵穴を伴うものがほとんどであるが、4.4 m 以下の小型のもの（SH 321・357）には、主柱穴といえる柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。また 10 棟で炉跡を、17 棟で壁周溝を確認したほか、9 棟で貼床を確認できた。貼床は、平面的には住居の中央部を残して周囲をコの字形やロの字形に  $5 \sim 20$  cm 程度掘り下げて掘形とし、そこに改めて土を入れて突き固めてつくられていた。

各堅穴住居からは多数の土器<sup>3</sup>が出土しているが、今回、試みに S 字状口縁台付甕（以下、S 字甕）が出土した堅穴住居について検討を行ったところ、S 字甕 A 類のみを伴う堅穴住居（SH 190・305・323・331）、A 類と B 類を伴う堅穴住居（SH 245・322・338）、B 類のみを伴う堅穴住居（SH 324・347・353）に分類できた。整理途中であるため、さらに詳細な検討が必要であるが、これらの堅穴住居の分布をみると、それぞれ  $15 \sim 20$  m の間隔をおいて点在しており、時期を同じくする堅穴住居は、ある程度一定の間隔で築造されていた可能性が考えられる。

**SH 324** 調査区南東に位置する堅穴住居である。住居内の北東隅の床面から土器がまとまって出土した（写真 34）。SH 183・198・323 と重複しているが、SH 198・323 については、土層断面の観察により、SH 324 が後出であることが確認できた。これは SH 324 から S 字甕 B 類（図 11 の 10）、SH 323 から S 字甕 A 類口縁が出土していることとも矛盾しない。残る SH 183 との新旧関係については、平面・断面とともに切り合いは不明瞭であったが、SH 324 より浅い SH 183 の床面に相当する硬化面などは確認できなかった。この点を勘案すると SH 324 が後出となるが、今後さらに詳細な検討を行う必要がある。

**SH 332** 調査区南東に位置する堅穴住居である。北側は重複する SH 331 により削平されている（写真 35）。東壁から南壁にかけて壁周溝が 2 重になつておらず、ほぼ同じ位置で建て替えが行われたことが想定できる。貯蔵穴は当初、南西隅で 1 基検出したが、南東隅の貼床下からも 1 基みつかった。建て替えに伴い改装が行われた様子が窺える。

**SH 338** 調査区東に位置する堅穴住居である（写真 36）。主柱穴は 4 基、炉跡は確認できなかつたが、南西隅で貯蔵穴を確認した。西壁ぎわ中央の床面から径 40cm 程度の石が出土した。石の表面の一部には磨面が確認できた。大きさや出土位置から作業台や踏み台などとしても使用された可能性が考えられる。

住居底面には貼床が認められ、その下の掘形から、形や大きさの揃った凹凸が検出された。堅穴を掘削する際の道具の痕跡と思われる。

遺構名	規模 (m)	方向	貯蔵穴
SH305	6.1 × 6.2	西	南東隅・南西隅
SH306	5.7 × 5.0	不明	南東隅
SH307	5.5 × 5.5	西	南西隅
SH319	5.6 × 5.8	不明	南西隅
SH321	4.0 × 4.2	東	無し
SH322	4.0 以上 × 5.2	東・西 2	南東隅
SH323	3.2 以上 × 5.5	不明	南東隅
SH324	6.4 × 6.5	不明	南東隅
SH331	5.4 × 5.4	不明	北東隅
SH332	5.0 以上 × 5.8	不明	北東隅・南東隅
SH337	5.6 × 5.7 以上	不明	南・南西隅
SH338	4.9 × 5.0	不明	南西隅
SH339	5.7 × 5.8	不明	南西隅
SH346	4.8 × 5.0	西 2	南西隅
SH347	6.0 × 5.8	北	南東隅
SH349	5.0 × 5.4	南 2・西	南東隅
SH350	3.2 以上 × 5.6	不明	南西隅
SH353	6.8 × 6.6	不明	南東隅
SH354	5.4 × 5.4 以上	不明	南西隅
SH356	4.8 × 4.8	不明	南辺
SH357	4.4 × 4.4	不明	無し
SH359	5.0 × 5.0 以上	不明	南西隅
SH178	5.6 × 5.6	不明	南西隅
SH183	5.0 × 5.2 以上	中央?	無し
SH188	6.0 × 6.0	東・西	東
SH190	7.2 × 7.2	東・西	無し
SH198	6.2 × 6.4	不明	南西隅
SH245	5.4 × 5.4	不明	南東隅

表 3 古墳時代初頭の堅穴住居一覧



写真 34 SH 324 (西から)



写真 38 SK 334 (東から)



写真 35 SH 332 (南から)



写真 36 SH 338 (北から)



写真 37 SB 325 (北から)

SB 325 調査区南東部で検出した掘立柱建物である。2間(3.2m)×2間(3.6m)の総柱建物で柱間は16~18mである(写真37)。柱穴からは土師器片が出土しているが、いずれも小片であるため、時期の特定はさらに詳細な検討が必要である。

#### (2) 遺物

堅穴住居と土坑を中心に、壺・器台・高杯・甕・瓶などが出土し、良好な一括資料となるものがみられた。まだ整理段階であるが、いわゆるS字甕は、A~C類までがあり、なかでもA類新段階からB類の出土数がもっとも多い。また、A類古段階のものが新段階のものに混在して出土する場合もあった。

SH 324 出土遺物(図11) 堅穴住居北東隅付近から集中して出土したものである(図10)。

1~3は甕。1は口縁部がやや内湾し、調整はハケメで留め、ケズリは施されていない。2は、口縁部は欠損するものの、おそらく大きく開き、弱い受口を呈するものと思われる。外面は全面赤彩、頸部内面にも赤彩が残ることから、口縁部内面にも赤彩が施されていたものと推測できる。体部上半に粗雑な彫撲横線文と刺突文、体部下方には穿孔が1箇所施されている。3はいわゆる瓢甕である。口縁部は欠損しているが内湾するものと思われる。体部低位に最大径があり、下膨れ状を呈している。外面にヘラミガキが施されている。

4と5は器台。4の脚径は13cmで口径を大きく凌駕する。脚部は明確な円柱部をもたず、受部から直ちに外反する。外面にヘラミガキを施すが、やや粗雑なため一部にハケメが残る。5は粗製の器台である。外面のヘラミガキは粗雑でハケメを多く残す。



図10 SH 324遺物出土状況図・見通し断面図 (1:40)

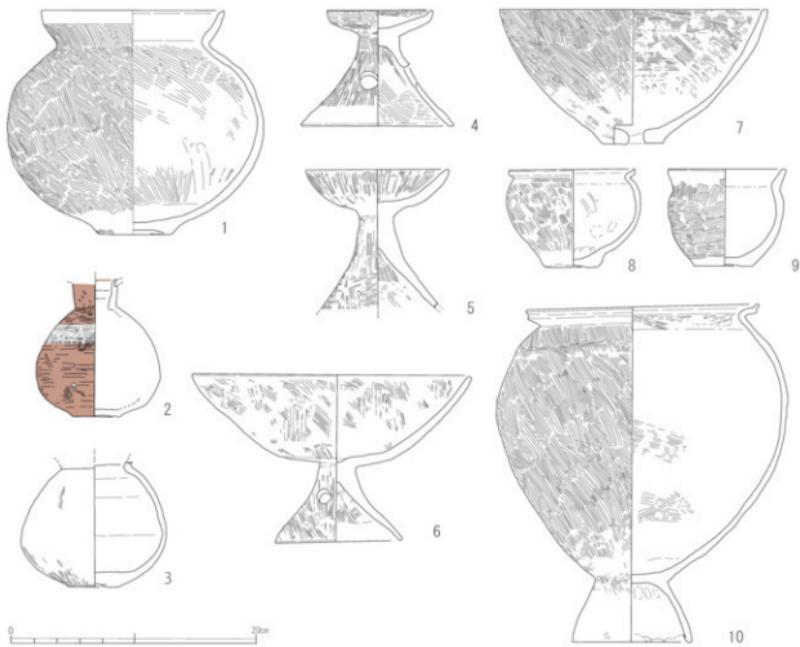


図11 SH 324出土遺物 (1:4)

色調も4が赤褐色を呈するのに対し、5は黄橙色を呈する。

6は高杯、杯部が強く外傾する。口径は23cmで脚径11cmを凌駕する。脚部高は5cmで低下の傾向がみられる。脚部の内湾は端部にのみ残り、透孔は3方に施されている。外面はハケメ後に粗雑なヘラミガキが施されている。

7は壺、8・9は小型の鉢。いずれもハケメによる調整が施されている。

10は壺。いわゆるS字壺であるが、口縁部に刺突文は無く、口縁部の外頸も弱い。体部は肩が張らず球形を呈する。肩部の横線は粗雑で退化傾向が窺える。ハケメは深く搔き取るようなものではなく、浅いものである。

以上、各土器の特徴から導かれる時期としては、廻間II式期が有力であろう。瓢壺は廻間II式4段階をもって消失するとされるが、3はそのなかでも後半の特徴がみられる。小型器台は廻間II式1段階をもって成立し、III期まで存続するとされる。したがってこの2つが共存する時期として廻間II式後半が想定できる。6の高杯の特徴も廻間II式後半とするに矛盾しない。ただし、10のS字壺については、外面の調整に新しい要素がみられるものの、体部の器形に廻間II式前半の要素が残る。この点について、小牧南遺跡の独自性をみることができるかどうかは、今後の整理作業の進捗に合わせて考えていきたい。

#### 4.まとめ

縄文時代中期 この時期の堅穴住居と掘立柱建物は前回の調査でみつかったものと合わせると、県内最多の検出例となる。また、前回同様、堅穴住居の多くが同じ場所で2回程度建て直されていることが分かった。このような入れ子状になる重複以外では、SH 248とSB 292、SH 344とSB 361の重複がみられるのみで、掘立柱建物同士や堅穴住居同士の重複はみられなかった。掘立柱建物は、3間×2間の大型のもの（SB 276・289・292）と、2間×1間の小型のもの（SB 280・287・327・361・362）が存在することが分かった。これらの建物の同時存在についてどこまで追求できるかは今後の課題である。集落構造については、大型の掘立柱建物の並び

等から環状集落的な指向の一端を読み取ろうとする試みもあってもよいが、現段階では、堅穴住居や小型の掘立柱建物の配置にはあまり規則性は感じられない。大型掘立柱建物の並びについては、斜面の傾斜の角度や台地縁辺の形状に沿った結果であるとみた方が自然であると思われる。

古墳時代初頭 堅穴住居や土坑からは、多量の土器が出土しており、一括性の高い好資料を多数得ることができた。

堅穴住居は、出土遺物から3期程度に細分できる可能性があり、今後さらに詳細な検討を行うことで、当時の集落構造やその変遷についてより明確にできる可能性がある。

#### 【註】

- ① 以下、この地域の台地や丘陵の名称については、四日市市土地分類調査会1992『四日市市土地分類』四日市市に従う。
- ② 以下、「陥し穴」の表記と陥し穴については、今村啓爾1983『陥し穴』『縄文文化の研究』2生業 雄山閣に依る。
- ③ 下記編年の4期～5期にあたる。  
綱綱茂・高橋健太郎 2008『中富式・神明式土器』『絶観 縄文土器』絶観縄文土器刊行委員会
- ④ 石井寛氏（元横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター）のご教示による。
- ⑤ 春日井伸・長谷川幸志「岐阜県美濃地方における縄文時代建物遺構の変遷」『関西縄文時代の集落・墓地と生業』関西縄文文化研究会
- ⑥ 第4章参照。
- ⑦ 篠原英政・吉田英敏 1989『塙原遺跡・塙原古墳群』関市教育委員会
- ⑧ 大江まさる 1973『伊賀遺跡－第1～5次発掘調査報告書－』各務原市教育委員会
- ⑨ 吉田英敏 1994『宮之脇遺跡A地点」「宮之脇遺跡B地点」「川合遺跡群』可児市教育委員会
- ⑩ 稲積昌也 2005『菟上遺跡発掘調査報告書』三重県埋蔵文化財センター
- ⑪ 縄文時代の掘立柱建物の上屋構造については不明な点が多いため、「梁行」「桁行」「間」などの用語は便宜的な使用である。
- ⑫ 前掲注③
- ⑬ 器種認定は現段階での暫定的なものである。
- ⑭ 田部剛士 2003『縄文時代前期・中期の石材利用』『縄文時代の石器』関西の縄文前期・中期－関西縄文文化研究会
- ⑮ 以下、この時期の土器の分類・編年および年代観については、赤坂次郎 1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センターを参考にした。